

平成23年度第2回 琵琶湖博物館協議会

日 時 平成24年(2012年)3月21日(水)

13:00~15:30

場 所 滋賀県立琵琶湖博物館 1階 セミナー室

会 議 次 第

1. 開 会

2. DVD放映

- ・県政週刊プラスワン「知れば納得!琵琶湖博物館」

3. 議 事

- (1) 中長期基本計画2011年度行動計画の実績・評価および
2012年度行動計画について
- (2) 新・琵琶湖博物館の創造について

4. 報 告

- ・文化庁ミュージアム活性化支援事業
「淡海まるごと博物館事業」

5. 閉 会

[午後 1時02分 開会]

1. 開 会

○司会（兼房副館長）：定刻になりました。二人の委員さんがおくれるという連絡が入っておりますので、ただいまから、第2回目の「琵琶湖博物館協議会」を始めさせていただきます。

最初にお断りしておきたいのですが、前回もそうございました。当会議につきましては、公開という形をとらせていただいております。したがって、傍聴席を設けておりますのと、記者席を設けておりますので、ご了承をお願いしたいと思います。

並びに、当協議会は定足数が過半数になっております。お二方がちょっとおくれるということでございますけれども、15名中、12名のご出席を賜ることになりました。従いまして、当会議が成立しておりますことを、まずもってご報告を申し上げたいと思います。

それでは、開会に当たりまして、篠原館長よりご挨拶を申し上げます。

○篠原館長：皆様、きょうは協議会に参加していただきまして、どうもありがとうございます。私が就任してから2年になりますけれども、昨年4月にリニューアルをすることを宣言して、県のほうに働きかけて、これからどんどんそういう話が進んでいくと思いますけれども、きょうの議題の中に、中長期基本計画の2011年度行動計画の実績・評価および2012年度行動計画についてということが1番目ですが、2番目にも新・琵琶湖博物館の創造についてということもございます。

昨年度は、大変いろんなことがありましたけれども、私どもの博物館に限って言うと、昨年新しい人が二人来られて、この4月からまた新しく二人来られるということで、ここにおられる人がそうだというわけではないですけども、だんだん博物館も高齢化してきていると言ってしまってもいいですけども、私も前の館長からかわりましたことですし、リニューアルに向けて一丸となって新しい博物館をつくっていきたいというふうに思います。

今までの蓄積を十分活かしながら、そのことでここにいる館員の人も十分その力を発揮していただいて、全国では学術的にも注目される、それからそのほかの面でも注目される博物館を目指してリニューアルしていききたいと思います。

そのためには、博物館協議会の中で活発な議論をしていただいて、皆さんの持ってい

る知恵をいただきたいと。ですから、自由にしていただいて、より我々のほうで創造的な博物館にリニューアルできるように議論していただきたいと思います。よろしく願いしたいと思います。

○司会（兼房副館長）：それでは、資料の確認をさせていただきたいと思います。

最初に、会議の次第です。3枚つづりになってございます。それから、配席図、資料1、中長期基本計画の活動計画、資料2、新・琵琶湖博物館の創造について、それから資料3、平成23年度ミュージアム活性化支援事業実施状況でございます。

それと、平成23年度第2回琵琶湖博物館協議会参考資料でございます。それと、当協議会の委員のほうから資料をいただいております。1つが、吉井委員からの「マーケティング視点に立った琵琶湖博物館」でございます。もう1枚が、村井委員のほうからお預かりいたしました一枚ものでございます。新琵琶湖博物館の創造「地域だれでもどこでも博物館」のイメージ図でございます。

以上が、準備をさせていただいております資料でございます。もし漏れがございましたら、私のほうに言っていただければと思います、

本来ですと、委員の皆様、あるいは私どものほうも自己紹介をさせていただく予定でございましたけれども、時間の都合もございまして、先ほどお手元にお配りいたしました協議会の配席図をごらんいただきまして、ご確認のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

ただ、委員の中で、廣畑委員におかれましては、第1回目のときにオブザーバーとしてご参加いただきましたけれども、その後、委員として正式に就任をいただきました。そういうことで、本日もご出席をさせていただいております。よろしくお願いいたします。

本日の議題につきましては、レジュメにございますように、議事2点ございますが、2番目にDVDの放映ということで予定をいたしております。つい先日、県のほうで作成しております県政週刊プラスワンというのがBBC放送でございます。20分ばかりで非常にうまくまとめてございます。直近の私どもの活動を紹介させていただくということで、概観していただく意味でも、ごらんいただきたいと思って準備をしております。まずは、それをごらんいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2. DVD放映

(記録省略)

○司会(兼房副館長)：以上でございます。いかがでしたでしょうか。ご意見等につきましては、後ほどの議論の中であわせていただければなというふうに思います。

議題に入る前に、ここでちょっと休憩をさせていただきたいと思います。

40分から始めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

[午後 1時29分 休憩]

◇

[午後 1時38分 再開]

○司会(兼房副館長)：お約束の時間がまだ来ておりませんが、皆さん、おそろいいただきましたので、再開をさせていただきます。

これから、(3)議事に入らせていただきます。

進行につきましては、当館の設置および管理に関する条例に基づきまして、議長は当協議会の会長さんでございます西様をお願いすることになってございます。

どうぞよろしくお願いいたします。

3. 議 事

(1) 中長期基本計画2011年度行動計画の実績・評価および2012年度行動計画について

○議長(西会長)：それでは、議事に入りたいと思います。

まず1つ目の議題といたしまして、「中長期基本計画2011年度行動計画の実績・評価および2012年度行動計画について」、最初に、事務局のほうから説明をお願いいたします。

○桑原企画調整課長：きょうは、ありがとうございます。企画調整課長をやっております桑原といいます。

ご説明させていただきます資料はA4で横長になっておりまして、これについてご説明させていただきたいと思います。ちょっと申しわけありません。着席してご説明させていただきますたいと思います。

今年度は、中長期基本計画第3段階の時期に当たります。第3段階では、昨年度、第

2回目の協議会でご説明させていただいていますように、中長期目標である「地域だれでも・どこでも博物館」の実現をめざして、第1段階及び第2段階の成果を踏まえた上で、地域応援機能の強化を図っていくことになっております。また、前回の協議会でご議論いただきましたように、2016年のリニューアル、新・琵琶湖博物館の創造（仮称）「水といのち」の展示交流空間の再構築に向けた準備の期間ともなっております。

このことを受けまして、今年度の行動計画の実績・評価および来年度の行動計画について、ポイントのみ、ご紹介させていただきたいと思います。

まず1番目に、1ページ目の博物館機能の強化の中の「資料が活用できる博物館」という項目、一番左側の基本方針のところの2列目の大きな項目になります。それについてご説明させていただきます。

ここでは、博物館活動の根幹となります資料の整備、活用を進めていくことが課題となっております。現在、琵琶湖博物館では、まだ整理ができていない資料が多数あります。さらに、毎年、寄贈や研究などによる収集などで、さらに多くの資料が集まってきております。これらの資料をきちんと保存して、しかも活用できる形に整理しておく必要があります。

今年度については、1万点近い資料について整理を達成することができました。これにより、資料の活用も進んでおります。来年度については、この右側の2012年の行動計画のところになりますけれども、特に寄贈されたコレクションの整理と活用について、重点を置いてさらに進めていきたいと考えております。

また、博物館資料の中には、毎年行っております企画展示やギャラリー展示、これらを開催する際に作成された展示物というのがあります。これらの活用を図るためのリストを作成するということが、今年度の目標となっておりました。ただ、5ページ目にある拠点となる施設整備のところにも見られますように、限られた人員の中で収蔵庫の環境維持、こういったものもあわせて行っていく必要があります。その辺から、第1段目の点については、思うように進めることができなかつたというのが、今年度に持ち越された課題となっております。

ただ、近年作成されたものについては、地域での展示会であるとか、交流事業であるとかによって、実際活用されているものもありますので、来年度については、まず大きなものについてリストづくりを進めていくということで考えています。

次に、2ページの、「新たな参加と発見ができる博物館」であります。

これは、第2段階で基礎ができた項目については、おおむね達成することができました。ただ、2段目の館外で展示を行うための諸条件の抽出ということについては、今年度、巡回展を行うためのマーケティングを行おうということで考えておりました。ただ、後に出てきますサテライト博物館の新たな展開の検討、さらには移動博物館の展示展開が始まったということから、これらの情報を集約することで想定していたマーケティングに変えることができるのではないのかと考えました。そこで、今年度については、とりあえず、この検討を保留するというようにしております。来年度については、サテライト博物館、移動博物館の状況を見ながら、これについては検討を進めていきたいというふうに考えております。

次の3ページ目、「体験と交流を促す博物館」です。これは上から2段目にあります学校サテライト博物館の運用方法の見直しということが課題になっております。学校サテライト博物館については、2007年度から開始され、学校の空き教室を利用して、企画展示やギャラリー展示で作成された展示物を中心に展示を行い、さらに生徒や地域の人々の独自の展示をつけ加えていくことによって、展示展開を進めてまいりました。さらに、これらの展示を使って、博物館の学芸員が講義やワークショップを行うことで、学校や地域との連携を深め、中長期目標である「地域だれでも・どこでも博物館」の実現に向けて大いに貢献してきたものと考えております。

今年度については、長浜市立永原小学校での展示活動を進めるとともに、高島市立青柳小学校から彦根市立若葉小学校への移設も行うことができました。現在のところ、これらは順調に進んでいっているものと考えます。また、学校の空き教室を多目的に利用するということが進んできております。また、学習指導要領が改訂されるなど、学校を取り巻く環境というのは5年前と大きく変わってきて、学校での受け入れというのなかなか難しいという状況になってきております。

ただ、それでも、このサテライト博物館がこれまで培ってきた地域との連携を図る機能というのは、博物館にとっても非常に貴重なものと考えられますことから、展開の対象を学校から公民館やコミュニティセンターなど、地域の人たちが集まりやすい施設へと拡大していくことを現在考えております。今年度はそのための一環として、展示物のリスト化を行いました。ただ、後から出てきます移動博物館との関係性を整理して、両

方で相乗効果があるような展開を、来年度は検討していきたいと考えております。

次に、「対話と応援ができる博物館」についてですけど、これはこのページの下段から、次のページまでまたがっております。

個々の項目の内容というのは、全体的にうまく進めることができたのではないかと考えております。特に4ページ目の1段目の真ん中あたり、目標達成状況の②のところにありますけれども、「あさ、ひる、ばん博物館を楽しもう!」、これについては、「びわ湖の日」30周年を記念して、地域のさまざまな人や団体に参加してもらって実施したイベントです。実施した3日間で2万2,374人の方が参加してくださいました。

このイベントは、参加してもらうことで、博物館活動の楽しさを知ってもらう。さらには、琵琶湖と人との関係について新たな発見をしてもらおうというものでした。アンケート結果から推定したところ、半数近くの方々が、何らかの発見があったと感じておられることがわかりました。

また、この「あさ、ひる、ばん博物館を楽しもう!」というイベントに合わせまして、「はしかけオープンハウス」という事業も開催しました。これは、はしかけグループやフィールドレポーターにも参加してもらって、それぞれワークショップをやっていたいて、地域の方々あるいは団体の方と連携・協働していただくものですが、これを行うことで、フィールドレポーターの参加者だけではなくて、それぞれのグループ、地域の団体や人々との交流、あるいは連携等が促進されたのではないかと考えております。来年度についても、これらのことはさらに推進していきたいと考えております。

次に、5ページに移っていただきまして、これは環境の整備という大項目になります。特に、下の段にあります柔軟な組織運営ということで話をさせていただきます。

昨年度末、2名の学芸員が退職し、今年度末にも2名の退職が決まっております。これらの学芸員については、既に補充されることが決まっているんですけども、選任するに当たっては、退職した学芸員の専攻分野にこだわらずに、必要となる分野で補充しております。また、新・琵琶湖博物館の創造に向けて、組織体制のあり方を検討しながら、将来にふさわしい琵琶湖博物館の活動に即した人材の補充を進めることが必要であると考えております。また、来年度から、この新・琵琶湖博物館の創造に向けて、準備室の設置も予定しております。

最後のページになりますけども、「社会的支援と新しい経営」の項目であります。

特に中長期目標を策定し、新・琵琶湖博物館創造を進めていくために、幅広く、多くの方々に来館していただくとともに、博物館活動に参加していただく必要があります。そのための仕組みづくりと方法が、ここでの課題となっております。

これについては、まず琵琶湖博物館はもちろん、琵琶湖ひいては滋賀県の自然と歴史について興味を持っていただくきっかけをつくるために、今年度、マザーレイク滋賀応援基金を活用して、さきにビデオでごらんいただきました「地域発見！参加型移動博物館」を作成しました。完成は、今年度末の完成にはなるんですけども、でき上がったものから既に展示・運営を始めて、今年度既に7件の展示活動を行ってきました。来年度については、琵琶湖・淀川水系を中心に県外展開を図っていくことで、琵琶湖や滋賀県に興味を持ってもらい、琵琶湖博物館に来ていただけるような運用方法を検討し、展示展開を行っていこうと考えております。

また、広報活動についても、従来の旅行雑誌に加え、今年度はラジオ媒体を使った広報を始動しました。この点については、松江委員から、昨年度末の協議会でアドバイスをいただいております。さらに、来年度に向けては、これに加えてインターネットを利用したリアルタイムで、興味を持ってもらいやすい広報活動なんかも展開していきたいと考えております。

最後になりますが、一番下の段の「存在基盤の確立」の項目になりますが、最初にも少し触れましたように、第3段階が2016年のリニューアルに向けた準備段階にもなることから、新・琵琶湖博物館の創造に向けた構想の推進という項目を、この第3段階の活動計画のところに新しく盛り込みました。

今年度については、館内でプロジェクトチームを立ち上げ、リニューアルに向けた課題の抽出と整理を進めてまいりました。来年度については、基本計画の策定に向けて進めていく必要があります。このことについては、次の2番目の議事の中で詳細な説明がございしますので、そちらのほうで説明させていただきたいと思っております。

以上で、簡単ではありますが、「中長期基本計画2011年度行動計画の実績・評価および2012年度行動計画」についてのご説明を終わらせていただきます。

○議長（西会長）：どうもありがとうございました。

今、説明していただきました。先ほどのDVDの内容も含めまして、皆様から自由なご意見をいただきたいと思います。

どなたからでも結構ですので、今のご説明、あるいは先ほどのDVDについての意見などございましたら、どうぞ。

はい、吉井委員。

○吉井委員：私、**去年の一回目委員会に出席させていただいて**、分厚い報告書というのをいただいて読み切れなかったとか、よくわからなかったと。そのときに、委員長さんも表現の改善ということを指摘されていたと思うんですけど、これを見ると、目標とそれの評価がちゃんと分けられて、達成できたのか、できていないのかということで、まず資料のつくり方がすごく改善されて、わかりやすくなったなという印象を感じました。

あと、これは質問ですけども、サテライト博物館とか、移動博物館の目的というのが、要するにミニチュアを持って行って見せたいのか、ミニチュアの博物館を持って行って、こちらに来てもらいたいのかというところの目的は何ですか。それがよくわからなかったのです。

○事務局（楠岡）：交流担当の楠岡と申します。

サテライト博物館のほうですけれど、基本的に県内で、今、学校に空き教室が生じているという地域があります。そういう空き教室を使いまして、そこに今まで企画展等をつくったいろいろな展示物を持って行って、それで展示する。その目的は、特に琵琶湖の北のほうの地域の学校は、なかなか琵琶湖博物館に来ていただけないというのが現状です。

そのために、こちらがそういう展示物を持って行って、かつ、うちの学芸員が学校に何回か出向いて講義をし、その学校を借りて、その地域の学校の先生が研修とかをやっています。そういうことをすることによって、琵琶湖博物館についてもよく知っていただき、かつ、それぞれの地域や琵琶湖についてよく知っていただくと。そういうきっかけを提供できたらという考え方をしております。

○吉井委員：この考え方というのは単発的なんですか。それとも、もっと包括的に、この地域、この地域というようなことでされるのか。何かサテライトで空き部屋があつて、そこでやりましたということはわかるんですけども、もう少し戦略的というか、目的を持って施行されているのかどうか。

今言われたことはよくわかるんですよ。だけど、それをすることによって、どれぐら

い博物館の内容を地域の人たちに知らしめられるのか、博物館の認知度を上げられるのかというような、包括的な目的というものがちょっと見えないなという印象があったんですよ。きょうは、答えは多分ないと思いますので。

○事務局（桑原課長）：移動博物館について、私のほうから説明させていただきます。

もう一つ出てきておりました移動博物館のほうは、さっきビデオで言っていましたような展示品をつくりまして、琵琶湖と滋賀県の自然と文化について、特に県外で知っていただくこと。それと博物館の紹介をすることで、極端な言い方をしてしまうと、滋賀県博物館への誘客を図り、滋賀県の県外でのファンを増やしていきたいというのが移動博物館の目的になります。

もう一つ、サテライト博物館のほうは、地域で展示とワークショップを行うことで、その展示についても、ただ博物館の展示物を持っていくだけではなくて、地域の人が身の周りにあるものをさらに持ち寄って展示をつくっていただくことで、地域の人に自分の身の周りのことをもっと見ていただく、知っていただくというきっかけをつくってきたいという思いで活動をやってきました。

それについては現在、少し曲り角には来ておりますけども、かなりうまくやってきたのではないかというのは思っております。以上です。

○吉井委員：簡単に言えば、地域どこでも博物館の具現化ということですね。

○事務局（桑原課長）：そうです。

○議長（西会長）：よろしいですか。

○吉井委員：はい。

○議長（西会長）：じゃ、ほかにどなたかございませんか。

はい、どうぞ。

○伊達委員：DVDに対する感想ですけれども、珍しく琵琶湖博物館の紹介の中で、**民俗部門**が取り上げられていました。琵琶湖博物館の紹介というのは、主に水族の展示などを紹介する番組などは非常に多い**ですが**、今回は、**企画**展示期間であったということでもある**の**でしょうけれども、民具のことを取り上げられていました。

委員の先生方の中にも、展示をごらんになった方はいらっしゃる**と思いますが**、大変いい展示だった**と思います**。私は民具の保存を専門にしている**もの**ですから、周りにも**民俗関係**の人たちが多く、**見学**をしたどの人たちからも、琵琶湖博物館の**展示情報**があ

りました。

そこで最初のころは無料で配布されていたパンフレットがあるのが、それはこちらの囑託の皆さんとか、日々雇用の皆さんが書かれた、とても立派な論考が載せられています。今回、この委員会の期間とは違うということで、恐らく皆さんに配布されていないのだと思いますが、とてもいい展覧会でした。

- 議長（西会長）：今の、配布していたというのは、どういうものですか。
- 事務局（用田上席）：今、ご紹介いただきましたギャラリー展示「民具を科学する」という展示の簡単な図録を、科研費で調査しました成果を発表する場として展示をやりました。科研費で印刷させていただきましたので、限定された方々にしかお配りできずに、きょうお配りできなかつた。今、伊達先生がご紹介なさったのは、その図録のことであります。
- 議長（西会長）：特別展の図録ですね。
- 事務局（用田上席）：そうですね。
- 議長（西会長）：わかりました。
- 伊達委員：無料配布のものでしたので、簡単に考えられると思いますが、その中の内容は、皆さんがきっちり調査された結果を、論考され、琵琶湖博物館の運営の基盤となるような紹介だったと思います。
- 事務局（用田上席）：わずかな残をお持ちしておりますので、あとでちょっと。
- 伊達委員：すみません。何かご無理を申し上げたみたいで。
- 議長（西会長）：ほかに、どなたかございませんか。
いかがでしょうか。
はい、どうぞ。
- 伴委員：大変努力のあとが見られて、内容的には満足できるものだと感じています。
ただ、毎年申し上げて申しわけないですけども、この博物館の一番いけないところは、来館したいと思う人がなかなか来られない。ふらっと来られない場所にあるということですね。アクセシビリティが非常に悪いという点でございます。いつも申し上げているように、何か頻繁に交通機関が来ているとか、そういうところが、この中長期目標にないし、来年度のところにもないというのがちょっと不満だなというふうに思います。
博物館の中だけのことは非常によく考えられているんですけども、もうちょっと例え

ば琵琶湖汽船であるとか、草津市だとか、そういうところと連携されてもいいんじゃないかなと思うんですけども、その辺はいかがでございましょうか。

○兼房副館長：委員のご指摘のとおり、なかなか交通機関の利用方法等につきましては、どうしても相手方がありまして、今回もバスなんかですと、むしろ便が減らされているような状況であります。早速もって行動を起こしたんですけども、どうしても利用者が少ないとバスの経営上の関係もございまして、なかなか増便の方向では考えていただけないのが実態でございました。

かとは申しましても、そのまま放置するわけにもまいりませんので、いわゆる事業の持ち方で、定期的にここの便をよくするという方法ももちろんですけども、例えば、最後のほうで報告を申し上げようと思っているんですけども、国のほうの交付金の制度で、23年度から事業に取り組んでおります。

その中で、例えば琵琶湖汽船であったり、直行のバスであったり、そういったことをフルに活用しながら、いろんなミュージアムを回って歩くとか、あるいは湖上遊覧というんですか、景観をめぐっていただくといったことを計画の中に盛り込みまして、そういうきっかけを増やすことによって、アクセシビリティのことなんかをやっていききたいなというふうに、今のところは考えているんですけど、残念ながら、定期交通になりますと非常に難しいというのが実態でございます。

○伴委員：例えば草津市なんかは、割と今、草津市の観光に力を入れようとしていますね。そういうところと一緒にあって、草津市の水生植物園もありますね。そういうところと一緒に何か活性化させるようなことをやっていってもいいのかなという気はするんですけど。

○兼房副館長：今ほど申しあげました交付金を使った事業は、実は琵琶湖博物館単独の事業ではございまして、お隣の水生の森、安土城考古博物館、あるいは琵琶湖汽船等々、いろいろと官と民を両方取り込んで、それを実行委員会形式でやっております。現に、水生の森のほうも協力していただきながらやる、そういう予定になっております。

○篠原館長：ただ、「みずの森」は、私のほうが活性化事業の中で協力を呼びかけて、それから企画展示のときに、向こうとこちら側のセットでできないかというような話も考えているんですけども、向こうのお客さんは比較的年寄りが多いと。こちらは比較的若い人が多いので、年寄りをこちらに持ってきて、若い人を向こうへ持っていくと。

そうすると、長期的にいけるんじゃないかというふうに思ったんですけども、御存じかどうか知りませんが、「みずの森」も指定管理者制になっちゃったんですね。園長さんがかわっちゃったんです。

○兼房副館長：なるという予定ではいるんですね。

○篠原館長：まだあるわね。今、研究団体みたいなものをつくって、そこが受け入れることになって、前の園長さんは、今は研究会の会長になっておられるんですね。だから、実際に植物のことをやっていた人自身は、もう決定権がなくなっちゃったんです。それで、草津市のほうから来られている行政の方で、ちょっと話が通じないところがあるらしい。

私、前のときには、ハタケヤマさんという方のところに話しにいったんですけども、今はその方は直接出てこられなくなった。何かあちらのほうもいろいろと抱えていて、なかなか協力体制がうまくできない段階なので、しかし、努力しながら、やっていきたいなと思っていますけれど。バスを減らされちゃったのも事実ですし、すぐに行っみたいですけども、無理だったですね。

○議長（西会長）：バスが減ったのは、ちょっと残念ですね。

○山本委員：すみません。

○議長（西会長）：はい、どうぞ。

○山本委員：その関連のことですけど、きょう現在、私みたいに車いすに乗っている者も、バスに乗って来ようと思ったら、来られると思いますか。今現在、ここに乗り入れておられるバスというのは、近江鉄道バスさん一社だけですね。それで連絡をとってみると、平日は低床バスを1台も運行していませんと。減らされたというより、私の場合はないんですよ。

その辺も踏まえて考えると、やっぱりアプローチするのに、すごく不満なところだなと感じるんです。土曜日・日曜日は5台ほど、JR草津駅さんから、こちらにある。こちらさんからは、4回線あるみたいですけども、平日にないというのは、これから春休みとかに関わってくると、ちょっとつらいものがある。また、草津市の関連の施設もあるということをお聞きしているんですけども、草津市さんが運行されている豆バスでしたか、あれなんかはこちらには乗り入れはないんでしょうか。

○篠原館長：来ていないですね。

○山本委員：そうですか。その辺もやっぱり、少し不自由な面があると思います。

もう一つ、バスの関係で言っておきたいのが、バス停から博物館へのアプローチが、車いすに乗っている者に関しては、急な坂なんですね。その辺の改善もまた考えてほしいなと思います。以上です。

○議長（西会長）：今のことについては何か。

いかがでしょうか。

○篠原館長：特にマイナスを、積極的にいい方向にはまだ答えられないので、答えることはありませんけれども、でも、これは私も直接乗り出して、草津市と話は一回しに行ってみたいなというふうには思っています。隣の状況もよくわかってないところがありますので。

ただ、活性化事業の中で提携したいということがあって、申し入れはしていて、いろいろ動きはあるんですけども、今のところ、いい答えは余りないということなので、一回直接私のほうも行ってみたいと思っています。

○廣畑委員：今の話で2つあるんですけど、バスのラインは見ていないのではっきりしたことは言えないんですけど、バスの便が悪いというのもあるんです。

バスの便数、要はバスの配車の間隔と、ここに来てもらって、実際にお客様に見ていただくときの所要時間の関係というのがどうなのかというのがわからないので、きちっと見ていく必要があるんじゃないのかなと。できるならば、ここで必要な基本的なプログラム、見ていただくための所要時間のプログラムみたいなものをきちっと出して、バスの便数が少ないのであれば、それに合わせて、入りと出のバスを配車してもらえようなことをお願いしに行ったら、バス会社さんにもそんな大きな負担をかけずに、お客様にもきちっとご案内をして、見ていただいて、ご満足がいただけるような、いい運営ができないものなんでしょうかという意見です。

もう一つは、県内の学校からたくさんこちらのほうにお見えになっているというふうに、私たち聞いています。そのときに、一番大きな課題になるのは何かというと、ここは物すごくロケーションがいいんですけど、雨が降ったときに困ります。

それは、バスからこの会館までの道中と、もう一つは、学校から出てくるとなると、社会見学の一つとして琵琶湖博物館に来るので、子どもたちがお弁当を持ってくるんですね。お昼を食べるというタイミングが、どうしてもこの博物館の前後に入ってくる。

ここは物すごくいいところなんですけど、雨が降ってしまうと、食事をとれる場所がないということ、過大視されている学校の先生が多いですね。

ですから、雨天時でも、何かそういったことに対応できれば、天気を気にせずに、こちらへ来ていただける学校を増やすことができるんじゃないかと思って、その辺も少し考えられたらどうかと思うんです。

○兼房副館長：2点でございます。

1点目のバスの運行便数と、うちのプログラムとといいますか、展示をごらんいただく時間の関係でありますけども、実は昨年、便の改正がありましたのが10月だったと思いますけれども、それまでは時間2本の便がございました。それですと、私どもをその間で十二分にごらんいただいて、帰れるという状況でした。

残念ながら、便の改正に伴いまして1便になってしまいました。これも十分見ていただくというふうにとれば便が1本でも可能なわけですが、一番困りましたのは、見ていただいて帰る4時半ぐらいの最終便が実はなくなってしまいました。それも、そういうことが判明したときに、早々に要請をさせていただきました。その後については、まだ解決を見ておりません。今後も引き続き、努力したいと思っております。

それと、アプローチの件ですけれども、実は毎年、私ども3回ぐらいアンケートをずっととってきております。その中で、やはり雨天時の昼食の場所、あるいはバス停からの距離の問題等々、何とかしようというベスト3に入っております。これにつきましても、即、手を打つのはなかなか難しゅうございまして、後ほどお話しさせていただきますけども、新・琵琶湖博物館の創造の一環として、展示の方針を考えております。その中では、利用しやすい博物館というのを一つのテーマに挙げてございますので、その中で、何とか解決できないかなというふうには考えております。

○西川副会長：関連で、3ページのところに屋内昼食場所の新設、あるいはILEC跡施設における昼食場所云々というのは、これはそういうこととは関連しないんですね。

私は全然知らないんですが、このILECとは何ですか。

○事務局：国際湖沼環境委員会という財団法人でございます。

○篠原館長：それを説明したらいいんじゃないですか。建物がどこにあって、何をやっているところとか。

○兼房副館長：ちょうどこの館の正面入り口の廊下を挟んで、前面に建物がございます。

県の湖沼関係の施設でございますけれども、そのあたりのところに、昔、テニスコートがありました。そこを実は私どもが借り受けまして、屋根だけの施設でございますけれども、結構大きい面積の場所があります。

現在、雨天等のときには、小中学生につきまして、そこで昼食をとっていただくというふうには工夫をしておりますけれども、いかんせん壁がございませんので、寒いとき、暑いときについては、いろいろと問題もございます。

○西川副会長：わかりました。

○議長（西会長）：よろしいでしょうか。

ほかに。はい、どうぞ。

○津屋委員：おくれてきて、すみません。

今、草津市とのというのはよくあるんですけども、守山市と結構一緒にプロジェクトを進めさせていただいて、今度4月8日に守山市民ホールで初めて開催します「ラ・フォル・ジュルネ」のプレイベントでは、まさに先ほど話題になった移動博物館で立命館守山の教室に琵琶湖博物館が出展いただくということです。

19ブース出る中に、博物館が来るということで、市町村初め市内の学校にも非常に細かく情報を、13万部のチラシがばらまかれているんですけども、その中に佐川美術館さんも来られているんです。実は布谷さんがまだこちらにいらっしゃるときに、佐川美術館で初めてキッズ向けのプロジェクトをさせていただきまして、それがきっかけになって、はしかけさんとか来ていただいて、佐川美術館としては初めて子ども向けのプログラムを館内でやっていたことがきっかけになりまして、実はずっと続けています。

今や年間の目玉事業になりまして、一日1,300人ぐらいの親子が集まるというイベントになりました。佐川美術館さんは子どもについての気合いも非常に高いです。守山市の教育が、本物に触れさせたいというキーワードはどの校長先生もおっしゃるぐらい、そういう意味では、守山のほうは素地が非常に高まっているように私は感じております。

実は4月8日のイベントのときも、市民ホールと駅とシャトルバスを10分おきに出しちゃうというのを、すぐ連動させて動いていくようなところがありますので、守山とのミッションというんですか、住所が草津市だとあれなんですけど、守山も非常に近くて、今回も琵琶湖博物館と守山市が近いけど、遠いようにもお見受けしたんですけど、

もっと守山市との可能性というのを探っていかれると、佐川美術館と何かそういうときにタッグを組むとか、民間企業さんがベースですので、例えばバスの何かとか、そういう質的な協力態勢もいろいろ可能性があるのかなというような、何かどうなんでしょうと。

○篠原館長：どなたか、守山市と語られる人はいるかな。

特にないようです。住民の言うことですからね。これから情報を提供していただいたら、いろいろと我々のほうも話し合ってみたいと思います。

今のお話、東京で月曜美術館というのが有名な、恐らくあれのバージョンに入るんだろうと思うんです。月曜日に美術館を開放して物すごく人気になって、博学連携でやり始めたというのがあって、初めは、学芸員の人も何か嫌がっていたらしいですね。だけど、世田谷区の学校は全部、その博物館に来ることになったという有名な話がありますよね。だから、『月曜美術』という本が出ていて、それは一つは参考になろうかと思えますけども、博学連携の話になると思うんです。いろいろさせていただきたいです。

○河上委員：守山市の小津小学校校長の河上でございます。

確かに守山市は、佐川美術館開館以来、いろんなところでの関わりもありまして、小学校4年生が、全校というか、9校あるわけですけども、バス代もすべて市と佐川のほうに協力いただいて、子どもたちをすべてを学校から会館までバスで送ってくれるというような形で、美術館の絵画なり展示物の紹介とあわせて、短い時間ですけども、いろんな製作を行うということで、子どもたちは非常に関心を持ちます。

佐川急便がそういう形でやるイベントには、キッズの形で親子が行きます。親がついてくるというのは大きな効果がありまして、そういうところが佐川美術館としてもメリットが高くなっていくのかなと。

それ以外にも、守山市は4月8日に開催する行事につきましても、子どもたちへの呼びかけを早い段階から、各関係団体を通じて流していく中で、人を集めていくことになどいうふうにして市を挙げて取り組んだらいいのか。学校だけではなくて、いろんなところでの啓発がうまく流れているのかなと。

確かに、そういう面言えば、隣にある博物館です。隣だって、遠いという言い方はおかしいですけども、バスを使わないと子どもたちを連れてこれられないという状況がありますので、その辺のところの対応については、いろいろと考えなければならないと

思います。いろんな意味で連携をする中では、本市としても大変喜んで、いろんなところで子どもたちに本物に触れさすということが大きな一つのねらいにしておりますので、そういうところも活用していければ、本市としてもありがたいなと思っております。

○議長（西会長）：よろしいですか。

どうぞ。

○兼房副館長：一つには、先ほどビデオの冒頭にもございましたけども、県の博物館協議会、私どもが実は事務局を担当させていただいております。全国の数も77館ありますかね。その中に佐川さんも当然入っておられるんですけども、事業の充実を図る中で、連携を具体的にとれるような形を模索してまいりたいなど。その節は守山市さん、ご協力よろしくお願ひしたいと思ひます。

○議長（西会長）：まだまだご意見はあるかと思ひますけども、予定の時間になりましたので、2つ目の議題に入りたいと思ひます。

また、発言されていない方は、後から振り返って、この議題についてもご意見をいただいてもいいかと思ひますので、先に進めさせていただきたいと思ひます。

（2）新・琵琶湖博物館の創造について

○議長（西会長）：それでは、2番目の新・琵琶湖博物館の創造について、事務局のほうのご説明をお願いします。

○事務局（松田部長）：事業部長の松田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、新・琵琶湖博物館の創造につきまして、ご紹介させていただきたいと思ひます。

今年度、琵琶湖博物館は、開館15周年の節目の年を迎えます。博物館の設置目的でございます湖と環境について考える機会や、材料を提供するということを目的といたしまして、「テーマを持った博物館」「フィールドへの誘いとなる博物館」「交流の場となる博物館」という3つの基本理念を掲げてまいりました。そして、この理念を実現するため、平成14年度からスタートいたしました中長期目標「地域だれでも・どこでも博物館」では、研究、それから資料収集、展示への地域の方の参加を促進してまいりました。

そして、中長期目標の第1段階では、地域に博物館が出ていって、観覧会や学校サテ

ライト博物館など、地域の人と一緒に開催する交流活動なども進めてまいりました。おかげさまで、来年度には800万人の来館者を迎える予定になっております。博物館の設置目的でございます湖と環境について考える機会、材料を提供するというのも、一定程度の役割を果たしてきたのではないかと考えております。

このような状況ではございますが、今後のさらなる進化を目指しまして、これまでの活動方法を検証し、社会情勢の変化を踏まえながら、新・琵琶湖博物館の創造に努めてまいりたいと考えております。目標は、次期中長期計画がスタートします開館20周年の節目の年を迎える平成28年でございます。

その準備段階といたしまして、今年度、プロジェクトチームを立ち上げまして、新・琵琶湖博物館を創造するに当たっての予備的な検討を行い、展示更新をするに当たりまして、3つのコンセプトを考えました。

1つは、これまでに蓄積されましたデータや資料を活用できる博物館。

2つ目は、20年の時期を経て世代交代が進む中で、3世代が利用できる博物館。

それから、3番目が、地域の人たちがさらに利用しやすい博物館。

この3つのコンセプトを考えております。

これを受けまして、来年度につきましては、さらに事業の推進を図るため、準備室を立ちあげ、4つの取り組みを実施したいと考えております。

1つは、新・琵琶湖博物館創造のビジョンの策定。

2つ目が、使いやすい博物館とするための県民ワークショップの開催。

3つ目が、マーケティング調査。

最後に、外部資金の調達方法について進めてまいる予定でございます。

ここでは特に2と3の項目につきまして、これは時代の変化をとらえ、コンセプトとして打ち出した3世代交流、及び利用しやすい博物館づくりという展開を考える上におきましては、さまざまな皆様から意見をちょうだいすることが必要だと思っております。

つきましては、協議会の委員の皆様におかれましては、この準備段階におけますご意見、ご助言をちょうだいいたしますようお願いしたいと思います。以上でございます。

○議長（西会長）：はい、ありがとうございます。

今ご説明のありました新・琵琶湖博物館の創造について議論していきたいと思っておりますが、この議題につきましては、きょう、出席していただいております吉井委員のほうか

らご意見が出ております。それから、きょうは欠席しておられますけども、村井委員からも資料が提出されています。

まず、吉井委員様のほうから、資料についてのご説明をいただきたいと思います。

○吉井委員：お手元の資料ですが、ここで議論するためにつくったというよりも、自分でまとめてみて、現状を理解したいということでまとめたものですから、私見であり、偏見が入っているかもわからないので、その分差し引いてお聞きいただきたいと思います。

○議長（西会長）：資料は、マーケティング視点というので、よろしいですか。

○吉井委員：外資系メーカーで約30年、研究開発、技術系の仕事をマーケティングリサーチしてきた関係があつて、この博物館の現状を見てみようかなと思いました。

そのときの視点は何かという、マーケティングという、どうしても商売とか、商品売るといふことがあるんですけど、実はアメリカのピーター・ドラッカーという非常に有名な方がおられて、彼が言っているところのポイントで、例えば博物館にとってマーケティングは必要かというような問題提起をしたときに、それは正しいのか、間違っているのかということを考えるに当たって、彼は別の表現の中で、要するに経営、すべて博物館経営においても、「過ちとしては、間違った答えを出すことよりも、間違った問いに答えることだ」と言っております。

じゃ、最初に我々が提起すべき問い、例えば2016年にリニューアルすべきかという問いに対して、答えはイエスかノーか。今はイエスで動いていますけども、その中でマーケティングを使っていくべきなのかどうかという問いに対して、ここ20年ぐらいでのマーケティング調査をしますよと言っているんだけど、それは正しいのかどうかというところ辺を、きょう理解していただきたいと思うんです。

実は、マーケティングを実施するに当たって一番重要なことは、5ページ目に、「マーケティングにおける5つの質問」というのがあるんですね。

これは基本的なことですが、経営主体の人たちがどういうミッションを持っているのか。どういう使命を持ってその経営に当たっているのか、顧客はだれなのか。ここでは顧客という言葉を使っていますが、博物館では利用者と考えてもいいんですけども、利用者はだれで、どういう価値観を求めているのかというようなことを理解しておかなければ、経営は成り立たないよということです。

じゃ、今度の20年目を迎えるリニューアルに関するお客様、来ていただく方はどう

いう方なのか。また、そういう人たちは何を期待しているのか、何に価値を持っているのかという事前調査が十分されないと、一方的な提供ではだめだろうということです。そして、結局、提供した結果として成果は何なのかというようなことが創造できる、またはつくり上げることができることによって、計画というものが多分発揮できるだろう。

言いたいことは、顧客はだれなのかを理解して、その人に合わせたことをやるべきだということが、ピーター・ドラッカーの説を使うと、それがマーケティングであるということによって理解していただきたいと思うんです。

振り返って、琵琶湖博物館が過去にやってきたことで言うと、布谷さんの著書、『博物館の理念と運営』という本があるんです。この中に書いてあることを見ますと、今言った、そのことがされているんですね。だからこそ、琵琶湖博物館のインターネットのロコサイトとかランキングを見ても、結構高い位置にあるのは、こういうことを示しているのではないかと。「利用者の視点で見直してみる必要がある」。

この理念に基づいて、この博物館は経営されているだろうと考えると、2016年を目指した方向性というのは、利用者の視点でやっていくべきだろうという中で、先ほど来議論がありましたように、ここに対するアクセスの問題は、利用者の90%が不便だと言ったら、いろんなバリアがあっても、それをしないとだめだろうと。ただ、そのデータが単発的で、包括的でないのなら、もうちょっと調査をすべきだろうということをお願いしています。

それと、この利用者に対して分析的なことをしてみたんですが、その次のページの3つの円で利用者を分類しました。ここの博物館に来られるのが約36万人、それと「地域どこでも・だれでも」体験交流ということで館内・館外合わせて8万人程度、それとバーチャル博物館としてのウェブで21万人。

これをどう見るかという問題があると思うんですけども、烏丸半島に来られる36万人の内訳を見ました。これはすべて2010年度の博物館の報告書から拾い上げたデータですので、琵琶湖博物館の顧客（その1）を見ますと、マーケティング的なポイントで言うと、高校生、大学生がもっと来てもいいのではないかと。今現在、3.5%ですね。それに比べて、小学生、中学生が30%近くいる。それはなぜなのかという問題もあるんじゃないかと。そのポイントは後に置きます。

もう一点、収入の面です。有料入館者数が17万人、無料が18万人、約半数の人は

ただで来ているということですね。そうすると、入館料だけを見て、もっと高めるとい
うのであれば、この18万人の方から何らかの寄附であるか何かわからないんですが、
お金をいただければ、何もしなくても収入は増えるだろう。ただ、来館者を増やすとい
うことであれば、やっぱり有料の方向性を考えるのか。というところ辺の、これは問題
があるということを行っているのではなくて、そういうものが見えてくる。そうすると、
有料、無料というものをどういう形で考えていくかということですね。

あと、先ほど言った高校・大学生、約2年前ですが、滋賀県の生徒数を調べてみまし
た。そうすると、高校と大学を合わせますと60近くの施設があつて、13万人ぐら
いの学生諸氏がいるんですね。そうすると、13万人いるうちの、来ている人たちが1万
人ちょっとですから、1割未満ですね。これは滋賀県外の方もおられるでしょう。

そうしますと、先ほど言った顧客という面で見たら、大学生、高校生がなぜ来ていな
いのかを分析することによって、この人たちを動員することで、一気に10万人来館者
が増える、理想ですけども。というようなことも考えられるので、顧客がだれなのかと
いうことを想定してプランを立てていかないと、ここをあいまいにしておくと、施策そ
のものがあいまいになってしまうと思いました。

もうちょっとお聞きしたいと思いますが、あと、インターネットです。今まさに、
ソーシャル関係の情報がこれだけ発達している中で、現在の琵琶湖博物館のインターネ
ット利用者情報というのを見ました。これも報告書から拾い上げたものですが、この中
で年間約13万件のアクセスしかない。私の感覚で言えば、これぐらいの規模の組織で
あれば100万人超えていいはずなのに、言葉は悪いですが、たった13万人しかアク
セスしていない。それと、「クエリ」で質問が来ているのが年間136件。博物館で問
い合わせ件数が136件でいいのかという問題ですね。というようなことが浮かび上
ってきました。

まとめという意味で、細かい話ではないんですが、先ほどの3つのポイントで、烏丸
半島にある博物館本体と、体験交流で館内、館外の人たち、それからバーチャル、この
人たちの施策が皆ばらばらなんですね、報告書だけしか見えないんですが。これを円滑
に動かすことによって、例えばウェブを見て、ここへ来ようという人向けに、具体的
な形で来てもらうためのホームページのあり方であるとか、例えば体験教室で学んだこ
をもっと知りたいと思った人が、ホームページでいくともっと詳しくわかるとか、これ

が円滑に動く、それぞれのお客様たちの満足度というのは、もっともっと上がるんじゃないかと。

そうすると、ここの烏丸半島に来ていただくということを前提でやると、交通の問題もあるんだけど、ホームページだとか体験交流で、「地域どこでも」でやることで、総括的に満足度が上がるのであれば、それも一つの大きな価値だと思うんですね。というように、2016年度のビジョン策定において、この烏丸半島を主体に、この活性化なのか、ソーシャルネットワークを通じた活性化を含めて、トータルで見た利用者ということを考えた活性化なのかという考え方を持つことで、随分変わってくるだろうと思いました。

最後のページで、私、個人的な感覚でつくった資料、「博物館利用者の満足度向上」これは私個人の表現であるんですけども、5つの階層に分けました。

例えば、博物館に来る人は、レベル1ぐらいだろうと。博物館と一緒に外に対して協働する人はレベル5だろうというようなことで、私は「はしかけ里山の会」ということで活動をしているんですけども、今現在、レベル4から5のところにいるだろうと。

要するに、博物館の中に入って友達ができ、いろんなことをやりながら、博物館を有効に利用している。さらに、今現在は外に向かって発信を始めているというようなレベルで、博物館の利用者の階層を分けたときに、私が定義するところのレベル5である必要はないんだけど、顧客って、どのレベルのことを期待している人たちが、どれぐらいの人数いるのかというようなことを理解すれば、そのプランがさらに、それぞれつながってくるのではないかと。単発的なものから包括的、連携的なものに変えていくことによって、活性化というのはできるのではないかなというようなことを考えました。これは、あくまで私的なものでまとめたんですが、ちょっとこういうものが見えてきましたということ。

○議長（西会長）：どうもありがとうございました。今までのご経験から、琵琶湖博物館について分析していただいたというようなところかと思います。

それでは、もう一人、村井様からの資料提供です。どなたかご説明をお願いします。

○事務局（上田）：メッセージというか、これを書いていたきたいという願いをしておったんですけど、ただけてないんですけども、基本的には、私ども事務局で作成いたしました3ページのイメージ図は、村井さんのほうが、私にはわかりづらいという

ことで、村井様なりのイメージということで、この一枚物の資料を出していただきました。

メールでお知らせいただいた中では、「新琵琶湖博物館の創造については、具体的な計画案はこれからと思いますが、村井の描く琵琶湖博物館をまとめましたのでお送りいたします。説明を加えませんかご理解いただけないかと思いますが、イメージ図として概観いただければと思います。」ということでございます。

皆さんがこれまで進めてきたことを、継承しているかということでないかと思います。博物館の中から、外にどういう形でアプローチしていくかというような形でまとめているんじゃないかなど。研究を中心として、そこから同心円状に、展示、そして交流、ここまでは館内での活動でございます。

それを、さらに館外に持ち出しまして、地域レベルで見ますと、琵琶湖ということがあります。世界というふうに広く目を開きますと、「湖と人間」ということで描いていただいているのかなど。

地域では、琵琶湖を知る・楽しむためのプログラム、例えば、この中には琵琶湖クルーズ等があってもいいんじゃないかと。そして、琵琶湖博物館を知ってもらうための展示活動ということで、多くの人が集まる場所にアウトリーチということでの出前博物館等ということです。それと、多くの人を巻き込んで蓄積されていく研究活動というものも地域レベルでは、いろいろとできるんじゃないか。

それから、右側のほうでございますが、世界・「湖と人間」というところでは、湖と人間のかかわりの体験プログラムというもので、例えば、どんなときでも、琵琶湖／湖があれば、生き残れる術を学べる体験教室などということで、例示として挙げていただいております、子ども、大人、ファミリー、企業、学校向けということです。あとは、「どこでも博物館をさがせ」ということで、かわいい絵をつけていただいておりますが、どこで、だれが、どんな活動をしたいのか、というようなイメージをもっと打ち出してはどうかということです。

館外では、琵琶湖の記録、「湖と人間」の記録 デジタルアーカイブ「i-umindo」というようなものをつくってはどうか。保存・継承、そして多くの人活用ということで、これは将来ビジョンとして不変だということは、「地域だれでもどこでも博物館」というようなことで、イメージ図をつくっていただいております。

ご本人からの言葉は直接いただけてないので、私もどのように解釈すればいいのかわからない部分もございますが、委員の皆様は、いろいろと私どもの活動をご理解いただいている中で、想像していただけるんじゃないかというお言葉をいただいております。

○議長（西会長）：どうもありがとうございました。

それでは、最初に事務局のほうのご説明の2枚の表・裏、それから吉井様、あるいは村井様のほうからのものも含めて、あるいは最初の議題も含めて、ご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

はい、どうぞ。

○山本委員：初めの事務局からの説明ですけれども、同じような意見になるんですけども、どこでもだれでも使いやすいということは、まず頭にあると思うんですけども、マーケティング調査で優先して、それだけでつけられてしまうと、また新しく導入されていく博物館に駐車バスの数が少なかったり、アプローチでも館内でも、スロープや坂道が多い展示場になってしまったりするので、利用する人間が少ないといえども、やっぱりだれが使っても使いやすいような創造の仕方をしてほしいんです。

今現在、ある展示室なんかは、車いすで行きますと、スロープで下りていって見る場所があるにかかわらず、そのまま順路的に行きましたら、目の前に階段が現れて、また元の位置に戻って行かなければいけないというような苦勞がある。最終的に、ここに来るまでに坂をのぼってきて、まずチケット売場の横に坂があります。その後、まだ何も見ない状態でエレベーターを上がって、上に行ってやっと展示室が見られますよね。

そして、2階のフロアを見た後に、またエレベーターで下りて、それで1階のフロアの展示物を見るというのが順路になっていると思うんです。最終的に、また一番下のほうから上がってこなければいけないというような、過酷な状態になっているんですね。そういうふうなことを、多分利用する人間が少ないから、それと、ここにおられる方も、車いすなんかで館内を体験されたことはないと思います。ワンストップというのも大切なんですけど、自分たちでもそういうふうな意見があったということで、一度体験されて、その立場に立って見ると、よくわかると思います。

小中学校なんかで、シニア体験の道具を使って体験してもらおうというのがあるんですけども、やっぱり先ほど言われた高齢者がよく来られている場所でもあって、その高齢者がこっちに來られたらという意見がありましたけども、そういうふうな擬似シニアの

体験ができるようなことも、自分たちの中で一遍取り組んでみるのも、より意識を改革できるのではないかと思うんです。

もう一つ、先ほど吉井委員さんのほうからありました料金、確かに障害者は無料なんですね。料金をとられてはどうかとは思いますが。いろんなところへ行っていて、障害者が無料というのはなかなかないんですね。半額というのが多く、介助者に対して、私は団体のほうから来させてもらっているのに、こんなことを言うたら怒られるかもしれませんが、そういうふうなのが通常になっているんです。ただ、言えるのは、やっぱり障害をもってここに来るのに、先ほど言うているように、バスが使えなければ、介護タクシーなんかは料金がかかるものを使ってこななければいけない。

ということになってきますと、法の中で平等というのが国民・県民・市民、みんなに対してのことだと思うんですけども、そういうことが確保されていないうちに、そういうものから料金を平等にとっていくのは、またいろいろ操作するような部分でもあるのかなと、その辺を聞かせてください。

○議長（西会長）：今、障害者の方ということで、車いすの利用を考えていただきたいというお話がありました。私は今、東京の葛西臨海水族園にいるんですが、23年前、平成元年にできた施設なんですね。そうすると、**階段などがあって**アクセスというか、利用の仕方が**不便なん**です。

車いすの方が非常に増えております。本当に10年、15年前には想像できなかったぐらいの方が来ておられるので、これからの施設はきちっと、そういうことを考えなきゃいけないんじゃないかなというのも、私も実感として感じております。ちょっとつけ加えさせていただきます。

事務局の方、何かございますか。

○兼房副館長：貴重なご意見として賜っておきたいと思えます。私どもの博物館も、先ほど申しあげましたアンケートを年3回とっておりますけども、身体障害者の方の利用が物すごく多くなってまいりました。中で拝見しておりますと、あるいは交流員からの情報によりますと、かなりご苦労されているというのは重々承知しております。

いかんせん、改良のためにはお金のかかるものがたくさんございます。何とかリニューアルに向けた形の中で取り組んでいければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○吉井委員：実は、2週間前に私、ここへ車いすの方を連れてきて、全館ほぼ押して回ったんです。その方は外人の方でちょっと重たい人だったので、すごく大変さがわかりました。例えば、階段の横に車いすで行ける傾斜路があって、そこで車いすを押しているだけでも、その重さでどどっというってしまう。

だから、モデル的に入口から出るまでのところ、または駐車場の問題もあると思うんですが、駐車場からここは別に車いすでなくても、シニアの方々は駐車場から上がってくるだけで、「はあ、はあ」言っておられますから、そういうモデル的なトライアルして、どこに問題点があって、そのときに例えば、専門の介助者が交流員の方であれば、その人が館内を案内しながら回ると。

物理的に改善すると、お金がかかりますけども、そういうことをすることによって、満たされない方に対してできるんじゃないかなど。私は、これもマーケティングだと思うんです。要は、ニーズに合わせたことで、いかにやるかということだと思うので、それを実際のデータに基づいてやっていくというのが大切です。多分、声だけ聴いていたら、そうだろうなと思うところでとまっていたら、これは進歩がないと思うので、実際にいろいろのパターンで調べてみたらどうかと思います。既にされているかもわからないですけど。

○篠原館長：ちょっとよろしいですか。

吉井さんのマーケティングのご説明は有効なものといいますか、大変意義深いものだと思いますし、プロジェクトチームに入っていただきたいなという感じもしますが、それはともかくとして、琵琶湖博物館の顧客のところでは私の知る限りですけれども、入館者の料金をとる、とらないというのは、博物館法の中では、御存じのように、入館料はとることもできるというふうに書いていて、本来とらないのが琵琶湖博物館も今まではそうことになっちゃっているんです。

これは、基本的に予算の中の研究費とか、あるいは展示の費用というものは連動していませんので、出と入りは関係がないんですよ。このことを決めるのは、我々が決めることができなくて、県立美術館と同じであって、全体がとらないということだったら、とらない。とると言うたら、とるということになる。ただ、自由度はある。企画展示は幾らにするとか、そういうのは少しはある。基本的には、ここで決めることはできなくて、もし、ただにするとすれば、私は無料がいいと思っているんですけども、全体にも

う少し県のほうに働きかけていかなきゃいけない問題なので、このことと直接は関係がない。ただし、お金をとるということになると、入館者が減ることは明らかですね。

千葉県が10館構想で打ってきたんですけど、堂本さんの時代に、無料だったのを有料にしてしまった途端にがたっと減ってしまったということがあって、無料のままずっと来ているんだったらいいですけども、一たん無料にしたものを、有料にすると大変なことになるんですよ。

ですから、直接的に、このマーケティングそのものは、我々のほうでは、しても意味がないということになるんですね。マーケティングの中で言うと、ほかのところは物すごく意味があると思うんですけど、このことに関しては我々のほうに決定権がなく、ここで決められるのなら私も即無料にしますけど、出と入りは関係ないので、これで展示の予算が減らされるとか、そういうことがないように私のほうでは努力しなくてはなりませんけど、基本的にはないというふうに理解しています。

○吉井委員：制度的な問題だと、こういうお金に関係するところは私も事前の知識がないので、客観的にデータだけ見ると、無料で入っている人が多いんだなという印象があったのと、先ほど言った寄付で、琵琶湖の例えば環境保全だとか、そういうものに対するドネーションという形での援助だとか、先ほど来、バスの運行で問題があると。じゃ、バスの運行費がここに来られる方の、例えばドネーションで運営できるのであれば、それも一つの案ではないか。

ただ、それもできない可能性はあるので、当然できないんでしょうけども、そういう発想の自由度というか、物を考えながら施策をいろいろ考えてみていけば、活性化というのは、非常にたくさんのやるべきポイントがあるだろうなと思っております。今ご指摘されたように、やっぱり収入と博物館の活性度というのは、私は一緒かなと思っていたんですが、収入はちょっと違うところで管理されているということであれば。

○篠原館長：歳入に入ってくるのと、予算でおりてくるのとは一応連動してないことになるんですね。

○吉井委員：できれば、口は悪いですが、そこで得た資金はこの博物館で使えるようになって、バス代に使えれば一番有効だと思うんですね。本来なら。

○篠原館長：そうですね。

○議長（西会長）：大分、時間も押しております。ほかに、ご意見ございませんでしょう

か。

はい、どうぞ。

○松江委員：前回の会議のときに意見を述べさせていただきまして、広報のことについてPRしていきたい。それをまたご採用いただいて、取り組んでいただいたことに感謝します。広報ということに関しまして、さらに突っ込んでいきますと、移動博物館等の問題に関してなんですが、県内いろんなところでおやりになっていると思いますが、集客という部分に関しまして、県外からのお客様もアプローチしていかなければならないと思います。

先ほどから、ここへのアクセスの問題がありまして、お車で来られる方は比較的便利であると思うんです。逆に、車で来られる方に対するアプローチを考えると、例えば高速道路を利用して、草津あるいは栗東等からこちらにおいでなる方もおいでになるかと思えます。そういう意味では、移動博物館の、草津とか、そういうパーキングエリア、サービスエリアに、いわゆる高速道路の利用者の方に対するアプローチとして持っていくという方法も、一つのやり方ではないかと。そうすることによって、滋賀県外のお客様に対する琵琶湖博物館の位置づけというものを知っていただくことができるのではないかというの、一つの取り組みの方法ではないかと思えます。

先週、京都の水族館がオープンいたしましたけれども、あちらには基本的に駐車場がございません。アクセス的にはバス、もしくは徒歩でおいでくださいということですが、この間の19日の月曜日ですが、飛び石連休の間の平日ではありましたが、朝早くから大変なお客様が徒歩でおいでになっていらっしゃるということです。

やはり最初のできた水族館に対する魅力というものがあって、そういう形でのお客様の集客になっているんだと思えますけども、そういった意味で、琵琶湖博物館の存在意義を高める意味でも、より多くの方に知っていただくために、県内施設の発信をさらに強化すべきはないかというふうに思います。

○議長（西会長）：どうもありがとうございました。

ほかには、いかがでしょうか。

○青木委員：交流ということに関して多少の意見を持っております。移動博物館ということで、いろんな活動をされているのはよくわかった、きょうのご提案ですけど、それから琵琶湖博物館という名前そのものが、とにかく滋賀県立博物館ではなかなか人が来な

いと。琵琶湖博物館であるということ、そのものが大きな集客なり、興味・関心を生んでいるというのは明白なことだと思います。そういうふうに考えていくと、滋賀県全体、県民そのものの中に、琵琶湖に対する愛着とか思いというのはすごく大きいですよ。

ここをくすぐっていくというのは、移動博物館、要するに外向きで地域と協働していく、そのキーワードになると思うんですけども、この交流の博物館の考え方や、スタンスをいかに柔軟にしていくかということもすごく大事だというふうに思います。お任せの移動博物館というのもあるかと思います。例えば、こんなものがあるから、これを持って行って、ここでやらしてよという、そういうスタイルもあると思いますし、もっとも柔軟にいけば、逆に言うと地域お任せ。

ただし、博物館の名前だけは貸しますよと。その名前を貸していくけども、中身は地域の人がつくっていくと。最初に琵琶湖博物館という名前がある。この博物館は物すごく柔軟性があるというのが、この博物館のすばらしいところだと思います。

とにかく琵琶湖博物館を知らない県民はいないんじゃないかというのが、まずですね。これが滋賀県立博物館だったら、どこにあるのとか、何をやっているのとか、疑問視する人はいっぱいいると思いますけど、琵琶湖博物館、それだけでイメージできますよね。けども、確かにちょっと離れた地域、私も湖西ですので、なかなか行けないよという人は多いと思います。だから、その交流をしていく。移動して、いろんな出前でやるような、その部分の博物館の考え方や、スタイルというのはまだまだ柔軟に考えられるんじゃないかなというふうに思います。

だから、実際にここに来るという人を増やすというスタイルと、それから外でいかに集客し宣伝をしていくかと、そこの柔軟性をさらに高めたらどうかというふうに思いました。

○議長（西会長）：どうもありがとうございました。

○事務局（桑原課長）：先ほど松江委員と、今、青木委員からのご意見について、先ほどの説明の中で私、お話しさせていただきましたけど、これまでやってきた学校サテライト博物館は県外まではなかなか展開できないんですけども、これまで企画展で使ってきた資料を展示して、それを核にして地域につくり上げてもらうという形で進めていこうと。さっき吉井委員からおっしゃっていただいた「地域だれでもどこでも」を形にしていこうというものが一つあります。これは、県外まではなかなか展開できていないです

けども、特に湖西や安曇川の青柳小学校とか、長浜の永原小学校、なかなかこちらまで来ていただけないところでも展開をしていきたいということを実績として、これをつけ加えさせていただきたいのと、あと、移動博物館については、基本的に県内の集客施設等で展示展開をしていくことで、より広範囲に県外の人にも滋賀県の博物館を知っていただきたいということで考えております。

次に、具体的にパーキングエリアでというのは、これからまた検討させていただきたいと思います。実は、先日3月11日に多賀のサービスエリアで震災イベントがありまして、移動博物館は別のところで展開していたので、それ以外の資料を持っていったということがありましたけど、そういう形で今後も進めていきたいと思います。よろしくをお願いします。

○議長（西会長）：はい、どうもありがとうございます。

それでは、長東委員のほうから、何かございますか。

○長東委員：今おっしゃっていたみたいないな感じで、移動博物館とか出前講座なんかを、北のほうの方は余りこっちのほうに来られないということだったので、ショッピングモールとか、そういうところでされると、子ども連れの方もたくさん来られると思います。いろんなお客さんが来られるので、そういうところで、もっともっとしていかれたらどうかと思っております。

○事務局（桑原課長）：移動博物館については、今、展開が始まったばかりですけど、実は現在、彦根の「ビバシティ」で移動博物館の展示をしております。移動博物館そのものは、基本的には県外ということを考えておりますので、あとは、先ほどのサテライト博物館が新しい展開方法を考えていくことで、両方で相乗効果を上げていきたいというふうに考えております。

いろんな複数を一度にというのは、なかなか難しいものがありますので、その辺で行けそうなところをなるべく力を入れていきたいと思います。よろしくをお願いします。

○西川副会長：まず、博物館の活動の基本は、やっぱり研究ということだと思んですけども、そういう点で、学芸員の方をちゃんと補充されたというのは非常に敬意を表したいと思います。恐らくいろんな交渉とか何かで大変なことがあったんじゃないかと思えますし、ほかのいろいろな博物館の話なんかを聞きますと、なかなか欠員が補充されないという話も聞きますので、さすが琵琶湖博物館だなというふうに意を強くしました。

それとの関連で言いますと、もう一つ、標本の収蔵、保管ということが非常に重要な要素だと思うんですけども、この中長期計画を拝見しますと、今年度は現行の施設とか設備の課題や問題点を整理することが予算不足のためできなかったと書かれていまして、ちょっと心配なんです。

それから、そういうことの関連で、今どきなかなかそういうことは大きな声で言えないような感じもありますけども、これは前回に申しましたけども、やっぱり収蔵庫の拡充ということも含めて、ぜひ考えていただきたいというように思います。

それから3番目ですけど、これだけ大きな震災とか原発事故を日本は経験しましたが、その後遺症として過酷な体験をこれから何十年もしなきゃいけないということですから、そういうものを反映したようなことが将来計画としてあってもいいんじゃないかと。例えば、ここの防災機能、あるいはかなり大勢の来館者、あるいは職員の方がおられるときに、何か震災があったらどうするんだというようなこと、耐震工事も進んでいるんですけども、例えば水の備蓄とか細かいことですけども、そういうような機能というのにも必要なんじゃないかなと思います。恐らくそういうこともすでにお考えになっていると思います。

最後に、この新しい計画のリニューアルの話で、特にご説明がなかった外部資金の調達に向けた検討ということで、これは非常に重要なことで、そういうことも考えていかなければ、もちろんいけないですけども、展示室のネーミングライツとか、企業サポーターを受け入れることによって、「人々が地域に関心を持ち、主体的に行動する地域社会の実現を目指す」というリニューアルの理念が阻害されるような形になってしまったら困るなというのが、率直な危惧です。

○議長（西会長）：どうもありがとうございました。

今のことについては、何か。

○篠原館長：管理のことについては、資料グループのほうで。

○事務局（山川）：資料活用グループのリーダーをさせていただきます山川です。

先ほどご指摘いただいた収蔵庫、補充設備等について、開館に向けて準備している段階では、資料等については、これから調査研究しながら受け入れることで、充実させていくということで、他館に比べては大変広いスペースの収蔵庫を考えさせていただいております。

しかしながら、棚ですとか、積層型にして十分に入れられるような空間はあるんですけど、中に置く移動棚というものは変えないで、買ってしまったというところが一番の原因です。後から予算取りをしていけばいいじゃないかというような、安易な私たちは反省すべき点だったんですけども、それに対して資料がまだなかったというところもあったんですが、15年経って、大変たくさんのご寄贈をいただきながら、資料がはっきりしてきましたが、そのころにはもう棚を買うお金がないというので、じか置きになってしまっている資料も多々あるというところなんです。

そんなことは言っておれませんので、IPMを進めながら、使わなくなった棚をどこからか持ってきてという、リサイクル的なところも考えながら、徐々に計画的に入れていこうという方向で検討をしています。今年度はそれに向けて、どこに、どういう棚が必要なのか。それとあわせて、防災等に関して、どこか危機になるような棚をきちんと固定するのか、していないのかということもチェックしながら、そういうリストをつくりましたので、それを踏まえながら、震災に対する防災に備えていきたいと考えています。

○西川副会長：そしたら、失礼ですけど、スペースとしては十分にあって、それをいかに立体的に上手に使っていくかというのは今後の課題だということですか。

○事務局（山川）：そうです。

○西川副会長：わかりました。ありがとうございます。

○兼房副館長：危機管理の件でございますけども、やはり観覧に来られるお客さん方の安全が第一ということでございますので、それを中心に考えております。あわせて、必ずしも展示物だけではなくて、薬品の問題であったり、あるいは水力があるために、その生き物の確保であったり、ありとあらゆるものがあります。

それを、総合的に危機管理マニュアルとしてまとめている最中でございます。部分的には、例えば地震への対応であったり、あるいは火事への対応であったり、初動マニュアルについては年間何回か訓練をしながら、細かい詰めをしているという状況でございます。

○篠原館長：それと、今、西川先生がおっしゃいましたように、外部資金調達の検討ということですけども、展示室のネーミングライツなどは心配の面はあるんですけども、これにはいろいろ幅があるので、研究が、こちらの言いたいことを制約されるようなこと

がないような形でのネーミングライツを考えていかなくちゃいけないと思います。

ただ、これは吉井さんのマーケティングもされているようなあれですけども、例えば大学生が3.5%しかいないとか、もっと少ないのは社会人、ここの滋賀県は、第二次産業従事者というのが46%あるんですね。それはほとんど男性ですよ。それが、例えばダイハツにしろ、京セラにしろ、パナソニックとか、46%が勤めている。その中の男性の社会人が少ない。ほとんど来ないわけですね。

その辺は射程にしないといけないだろうというふうに思っているんですよ。要するに、その人たちが、こういう環境や生物多様性について理解しなければ、日本は変わらないというふうに考えないといけないというふうになれば、そこら辺を射程にしていくというのは、大学生もその予備軍ですから、そういうことだというふうに思うんですね。

その辺の連中に、簡単に言うと、僕の基本的な姿勢は、お金は出すけれども、口は出させないという姿勢でやるような方向に行かないといけないけれども、ここはどうも感じからすると、パナソニックにしろ、それから京セラにしろ、環境問題に関してはかなり先進的な企業がありそうということなので、そこら辺との関係を結んでいきたいというふうには、私個人としては今のところ持っているんですよ、全体では。

ですから、この外部資金調達に向けては、十分配慮しながら、制約を受けるようなことがないような形でのやり方を考えていきたいというふうに思っています。以上です。

○議長（西会長）：どうもありがとうございました。

大分と時間が来ているんですが、どうしてもという方はおられますか。

よろしいですか。じゃ、ちょっとだけ私も言わせてください。

マーケティング、あるいは新博物館の計画とかというのがあります。博物館の評価という形で数字がどうしても中心になってくることがあるんですが、先日聞いた話で、入館者数をどうするかとかという、その博物館を直接利用する人、あるいはそれによる収入とかで経費を賄うという、そういうレベルのもの、それから、そこへ来る人の周りで宿泊されるとか、お土産を買うとか、そういうものの収入まで含めた効果というレベル。

それよりも、もう一つ大きなレベルのものがあるんじゃないかということでした。それは地域のイメージを上げるという話だと。それは、ちょうど美術館の人が多かったんですけども、長崎の美術館がすごく評価を受けているという話で、長崎、倉敷、金沢

と。これが今、美術館で評価を受けている場所だと。そういうふうになると、そこに住みたいと言う人も増えてくるしというふうに、今までよりももう少し幅を広げて、博物館の価値というか、効果というか、そういうものを見ていく必要があるんじゃないかとか、そんな話があったので、そういうふうに評価を上げられるような琵琶湖博物館を目指していただければと思います。

先ほど言われたように、琵琶湖というのは全国知っていますから、それをネーミングにしているというのは非常に強いと思いますので、何かいい博物館を計画していただければと思います。

4. 報告

・文化庁ミュージアム活性化事業

「淡海まるごと博物館事業」

○議長（西会長）：それでは、最後に報告ですね。文化庁ミュージアム活性化支援事業についてということです。

○事務局（松田部長）：それでは、平成23年度ミュージアム活性化支援事業実施状況につきまして、報告させていただきます。

こちらの事業は、文化庁の補助金事業でございまして、平成23年度から3年度という時限で継続されていくものでございます。その中で、私どもの博物館はミュージアム活性化支援事業というのを受けておりまして、今年度につきましては、安土城考古博物館さんと一緒に開催させていただいております。

1ページの(1)淡海まるごと博物館 地域だれでもどこでも博物館でございまして、最初の映像にもございましたけども、大型ショッピングモールでの出前博物館事業を実施しております。平成24年2月15日から19日までは、イオンモール草津、そして現在開催されておりますけども、ビバシティ彦根のほうで25日まで展示をさせていただいております。

それから、(2)連携講座「琵琶湖 自然と文化」を開催させていただきました。こちらは、安土城考古博物館の学芸員と、当館の学芸員、それから外部から招聘しました専門家を交えまして開催したものでございまして、安土城考古博物館で開催いたしました「魚と人」では、およそ140名の方が参加していただきまして、お話を聞いておら

れます。それから、当館で開催しました「太古の人と動物が来た道」におきましても、およそ140名の方が参加され、非常に盛況のうちに開催することができました。

それから、(3) 体験学習の連携開催でございます。こちらは安土城、それから当館でっております体験学習のいいところを、それぞれ組み合わせながら、よりいいものをつくっていかうというものでございまして、当館では「縄文コースターを作ろう」ということで、安土城考古博物館の学芸員の方に縄文土器について説明を受けながら、実施させていただきました。

そして、(4) 琵琶湖体験クルーズ「歴史体験クルーズ2011」というものを実施し、船で沖島に行きまして、その文化、それから自然等について学ぶ機会を設けさせていただきました。

これが、今年度の事業でございます。

そして、3ページ目でございます。こちらは来年度の事業で、現在予算申請をしているところでございます。上のほうは、「地域だれでもどこでも文化遺産活用事業」といたしまして、3つの事業を考えております。下のほうは、「地域連携強化事業」といたしまして、4つの事業です。

それから、4ページ目、「地域だれでもどこでも参加できる博物館事業」としまして、1つの事業、これは安土城考古博物館のほうで主にやるものでございます。それから、「国際交流拠点形成事業」といたしまして、1つの事業を考えております。こちらの外国語パンフレットの作成と、ワイヤレスガイドセットの設置でございます。

博物館周辺、それから地域を紹介したパンフレットを作成しまして、こちらに外国人の方を誘客しようというものでございます。それから、ワイヤレスガイドセットにつきましては、展示室におきまして、一人が解説し、それをレシーバーで受けまして、参加された方が、その説明を聞くというものでございます。

最後に、「地域だれでもどこでも地域の魅力国際発信事業」でございまして、2つの事業を現在計画しておるところでございます。

以上、簡単でございますが、文化庁の補助金事業について説明させていただきました。

○議長（西会長）：どうもありがとうございました。

今年度行われた事業の報告、それから来年度、間もなくですけども、24年度の事業についての説明でした。

これらについて、何かご質問がございますか。はい、どうぞ。

○伊達委員：2ページですけれども、開催状況のところ、琵琶湖博物館が2回で、安土城考古博物館が26回という、この差はどういうことなのでしょう。

○事務局（松田部長）：安土城さんのほうは、かなり積極的に実施されたということでございまして、当館ではなかなか歴史系とマッチングした体験学習を実施することができなかったということでございます。

○議長（西会長）：安土城の考古博物館は、こちらのあれを向こうでやられたと。

○事務局（松田部長）：実は、その辺は余り連携ができていないところではございました。当館では、そういうことをやれたんですけども、安土城では余り実施されていなかったと思います。

○伊達委員：ということは、これだけの差があると連携開催という意味をなしていないのかと思いますが、それは、職員さんたちの交流があったということによろしいですか。

○事務局（松田部長）：はい。

○篠原館長：ちょっと、これをエクスキューズさせていただくと、この予算そのものが3月の終わりになって、急に文化庁のほうから言われてきて、4月までの数週間間に全部決定しろという形で、向こうもばたばたしていたんですね。お互いに、別々にやったものを、ちょっとドッキングするような格好になったので、これが初年度なんですよ。

ことは、だから、もう少し予算を立てるときに連携できることは連携しようと。3年計画になる可能性が高いので、2年目の予算を立てているんですけど、一番初めのは、はっきり申し上げて、我々が悪いんじゃなくて、文化庁が悪いんです。完全にむちゃくちゃでしたから。最後、3月の末に提示されて、4月の1週目か2週目に答えを出せと言う。そういう経緯もあるということです。

○伊達委員：はい、わかりました。

○兼房副館長：ちょっと補足させていただきたいんですけど、24年度の一覧表を示させてもらったと思います。タイトルの右手に事業規模が書かれてございますけれども、実は、これは文化庁のほうに申請をしているという申請総額でございまして、向こうのほうで交付決定を受けた額ではございません。相当厳しいやに聞いておりますので、この額がかなり減ってくることも考えられます。本来ではありますけども、何とか精査をしながら取り組んでまいりたいというふうに考えております。以上です。

○西川副会長：関連ですけど、こういう予算が来て、ご苦労されて、その外部資金をちゃんと導入してやっておられるわけですよ。それが、中長期計画のここには全然反映されていないので、すごくもったいないと思うんですよ。

○兼房副館長：今の文化庁のミュージアム活性化事業といいますのは、実は実行委員会方式をとるということが命題になっておりまして、県単独でやるということが許されておりません。したがって、県とか民間とかいうことで、実行委員会をつくりまして、その中でこの事業を取り組んでいく。

したがって、国から交付金というのが、いわゆるトンネル方式で県の予算を通っておりません。県の予算を通さずに、直接実行委員会にお金がおりてくる。そこで、整理をしていくという形になります。したがって、中長期計画につきましては、あくまで県立琵琶湖博物館ということでの策定でございましたので、ちょっと入れられています。

○西川副会長：わかりました。しかし、普通の人間がこれを見て、博物館のアクティビティを担保させていただくいいところがあるので、いろんな努力というのはみんなこういうものでというのは、ちょっともったいないと思いました。

○兼房副館長：反省を踏まえて、13年度計画にはなると。

○議長（西会長）：ほかには、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

では、そろそろ時間も来ましたので、本日の議事を終了したいと思います。

長時間にわたって貴重なご意見、どうもありがとうございました。

それでは、事務局のほうに進行をお返ししたいと思います。

5 閉 会

○司会（兼房副館長）：西会長さん、どうも長時間にわたりまして議事の進行、ありがとうございました。

また、委員の皆様におかれましても、非常に熱心にご意見をちょうだいいたしまして、まことにありがとうございました。

冒頭にちょっと申し上げましたけれども、新・琵琶湖博物館の創造ということで、来年度ですけど、24年度にビジョンを策定することにしております。ビジョンですので、あくまでリニューアルだけではなくて、交流のあり方であったり、あるいは資金獲得の

話であったり、全般的なことにかけて議論をしてみたいと思っております。

したがって、皆さん方から貴重なご意見を賜りましたので、それを鋭意詰めてまいりたいと。さらに、4月以降、新・琵琶湖博物館創造準備室というものが立ち上げ、設置されることになりました。なかなかその予算の限られた中で、このような手当をしていただいても、やっぱり期待があるのかなというふうに思っています。鋭意頑張ってみてまいりたいと思っております。どうぞ、またよろしくお願ひしたいと思ひます。

本日は、どうもありがとうございました。

[午後 3時26分 閉会]